

ウィズコロナにおける都市祭礼の在り方に関する一考察 —平成期における西宮神社十日戎開門神事福男選びの変遷から—

荒川 裕紀*

Challenges faced when organizing Urban Festivals in the With-COVID-19 Society

Hironori ARAKAWA

ABSTRACT

This report describes the challenges faced when organizing the "Choosing the Lucky Men at the Opening of the Gate Ceremony" in Nishinomiya Shinto Shrine, a festival held during the COVID-19 pandemic. First, we give a detailed description of the annual festival "Choosing the Lucky Men at the Opening of the Gate Ceremony" history and its changes during the Heisei Era (1989-2019). Furthermore, it is reported and discussed the contents of this year's event and the reasons for its implementation. Based on the author's participation and observation of the event and information acquired from surveys and interviews, the author concluded that it is desirable to hold this kind of religious festival during difficult times, even if the festival needs to be adapted. This festival is an excellent example of how to deal in the future with grand-scale urban festivals during the "With-COVID-19" society.

KEY WORDS: with-COVID-19 society, folk knowledge, urban festival, sustainable relations

1. はじめに

前回紀要での論考1)においては、コロナウイルスによる感染症の拡大の中、地域祭礼を催行・(結果的に)継続した、西宮神社の例大祭、「西宮まつり」について、その成立とコロナ以前の催行形態について詳述した後、2020年度の催行の実際とその実施理由について報告・考察した。元来3日間開催であったものを1日に短縮し、催行の人員を神職と地域住民に絞り、人員削減を行う形で実施した。結果的に、神社・地域は、「祭礼の継続」を選択し、実行したのであった。同時に、毎年1月9日から11日まで同神社で催行される、近畿圏の一大祭礼として取り上げられることも多い、コロナ禍以

前の「十日戎」における「自粛中の継続」の歴史的な事例を挙げ、その開催された経緯と原因について明らかにした。特に1月10日の午前6時に行われる「開門神事福男選び」は近年、諸媒体での報道によって全国的に認知され、十日戎の諸儀礼の中でも特に注目されているが、過去に遡ると諸事情によって、西宮神社によってこの神事の不催行が検討された年もあった。

例えば、1989(昭和64・平成元)年の正月から十日戎にかけての時期は、昭和天皇の御重篤期・崩御と重なり、まさに「自粛期」であった。それにもかかわらず、当時の十日戎は、それまでの「福男競走」を「神事」「福男選び」と言い換えることによって、神道祭礼的な一面を表出させ、催行させたのである。その結果、例えば神戸新聞などでは「平成元年一番福」と報道(1989年

*人文科学系

1月10日夕刊)されることに繋がった。「自粛ムード」の中にあっても「新しい平成を祝す」十日戎として認知され、「憚ることのない」参詣を可能とした。このことは、空前のバブル景気只中であり、「福神えびす」への社会的な参詣欲求に応えることとなったのである。

2020年9月は主に衛生的な理由で、1989(昭和64・平成元)年1月の場合は政治的・社会的な理由によりという違いがあるが、祭礼実施の側面から考えた際、どちらも「中止するのではなく、催行し、結果としては継続した」という点では共通する面を持つ。福神・えびす信仰という特殊性があるかもしれないが、この地域の「(形は変容すれども)祭礼継続することこそ、大切」という強い思いが2020年のフィールドワークからも、1989年の資料からも伝わることとなった。

当論考においては、「伝統の継続」に力点を置いたこの西宮神社とその氏子地域における最大の祭礼とも言える、「十日戎」、その中でも「十日戎開門神事」がこのコロナ禍においてどのような実施形態となったのかを明らかにする。結論から述べると、開門神事は「催行」した訳であったが、そこにはまさに「伝統の継続」への葛藤と「祈り・祀り」の付与があった。その伝統を培うこととなった、平成期での「十日戎開門神事福男選び」が辿った経緯を、資料や本調査者が25年以上続けているフィールドワーク等から、どのような伝統と意味性が当神事に新たに含まれたのかを明らかにする。その上で、2020年10月以降の実際の祭礼関係者への取材、フィールド調査、新聞報道などから、開催に向けどのような議論がなされ、1月10日の「新しい実施方式による儀礼」がどのように検討され、創出されていったのかを報告し、まとめとして考察したい。

2. 昨年のコロナ下における祭礼について

2019年末より新型コロナウイルス(SARS コロナウイルス2)が世界中で感染症(COVID-19)を引き起こし、本報告者が調査領域とする地域祭礼に関しては、2020年初頭以降の感染拡大に伴い、その多くが中止・延期を余儀なくされた。

しかし、昨年度の論考で取り上げた「西宮まつり」に関しては、上記の「中止・延期」ではなく、形態を変化させながらも「催行」した。具体的には、例年は3日間催行するところを、9月22日の1日に短縮して催行された。全世界の祭礼が中止・延期される中で、縮小しながらも例祭を含めた「西宮まつり」を催行したことは、当事者にとって大きな決断であった。まさにポストコロナ・ウィズコロナを考慮した祭礼を考える上で大きな前進になったと考える。2020年9月当初は、感

染拡大がある程度抑えられていた事情があったために催行できたとも言えるが、リスクを冒してでも催行する必要があるという強い信念と祭礼関係者の強い要望が今回の結果につながった訳であった。

昨年度の論考の中で、昨年度の「西宮まつり」継続に関しては、縮小しながらも「祈る・祀る」という神事性の部分を極力残すことで成功させたと言える本報告者は主張した。例えば、「台風除け」「豊作・大漁祈願」のメッセージ性が強いとされる、海上船渡御中に実施された、「かざまつり」後における戎舞においても、病魔退散の祈願を挿入することによって、結果的に対コロナという新たなメッセージ性を組み込むことにも繋がったのである。この「祈る・祀る」祭礼という部分を既存の祭りに付け加え、新たな意味を持たせることは、神道を含む既存宗教系の祭礼の場合、原則1つのテーマで成り立っているイベントに比べて比較的容易であると言えよう。例えば、三木英²⁾3) や森栗茂⁴⁾は、阪神大震災以降の神戸市長田区の地藏盆の事例や、神戸市東灘区の本住吉神社地車祭りの事例などでも、一時的にせよ慰霊の意味を持たせ、経年的に各祭礼の持つ意味が変化していったことを指摘しており、既存宗教発の祭礼の持つ懐の深さを示している。

西宮神社においては、昭和天皇崩御の際に十日戎開門神事が社会情勢に合わせて変容した事例が過去にあるというのは大きいであろう。この開門神事については、元々が開門時における拝殿までの参詣客の競争に過ぎなかったものである。しかし1989年の天皇崩御による自粛を境に、開門まで実施していた物忌の一種である「居籠(忌籠)神事・祭り」を延長することによって、西宮神社として神事化させた訳である。そこから30年以上たった現在においては、神事として社会的にも認知されている。そこには、マスメディアの報道と神社の広報による効用があるだろうが、それ以外にも、社会を取り巻く外的な要因によって変容してきた。次項では、平成への改元によって生まれた神事が、平成期にどのような変容を遂げ、どのような祈りと意味性を持ってきたのかについて明らかにしたい。

3. 1996年の開門神事

1989(昭和64・平成元)年の「開門神事福男選び」の創出以降、参加者自身が争って「一番福」を勝ち取るのではなく、(祭神である蛭子大神が福男を)選ぶという、「福男選び」の語が年を経るごとに社会的に認知され、定着していった。その一番の契機となったのは、1996年の開門神事でないかと本報告者は考えている。

1995年1月17日、兵庫県南部地域を中心として「阪

神淡路大震災」が発生し、6000人を超える犠牲者と甚大な被害を生み出した。西宮神社も多数の箇所被害を受けた。阪神間の広範囲で被害を受けたことで、復旧のためのボランティア活動が活発化し、国内においてはボランティア元年と呼称されるほど、活動が本格的に認知された。活動の中心となった神戸では「がんばろう神戸」を合言葉に、本報告者を含めた多くの被災者たちが諸活動に触発され、復興に向けて能動的に動き出すということにも繋がっていた。1年経った1996年の十日戎開門神事は、まさにその過渡期・復興期に実施されたものであった。

当時、西宮神社は未だ復旧・復興の途中過程にあった。しかしこの神社の様子は、マスメディアに取り上げられ、甚大な被害を受けた氏子地域の復興のシンボルとして表象されることにも繋がった。震災前までは、十日戎開門神事に関しては、新聞においては祭礼当日の10日が平日であるならば、例えば朝日新聞では、大阪本社版の当日夕刊の3面、日祝日であるならば次の日の朝刊の阪神(地方)面に掲載されることがほとんどであった。開門神事創出以前の神社による積極的な広報が無かった頃は、記事にならないことさえあった。しかし、この1996年1月10日の朝日新聞大阪本社版夕刊(記事1)では、「復興」のシンボルとしてこの開門神事をカラー写真付きで一面に載せたのである。内容は右の通りである。



記事1 1996年(平成8年)1月10日朝日新聞夕刊



記事2 1996年(平成8年)1月10日神戸新聞夕刊

「肌を刺す寒さとなった10日早朝、「本えびす」を迎えた兵庫県西宮市のえべっさんの総本社、西宮神社で、一番福をめざして若者たちが境内を疾走する「走り参り」があった。江戸時代から伝わる神事。今年は「震災を乗り越えよう」という願いがこもった。午前6時、震災被害の修復を終え、朱を塗り直された表大門の扉が開いた。徹夜で待ち受けた約650人の若者らが一斉に走り出し、約200メートルの参道を駆け抜けた。(後略)

この夕刊一面に掲載されたことは、西宮神社が「えびすの宮総本社」であることが阪神間のみならず大阪本社版が配布される全域(近畿圏・中国・四国)への広報にもなっている。必然的に、読者としては阪神間以外の開門神事を知らない層が多くなるために、従前の新聞資料よりも開門神事自体の説明が丁寧であった。さらに興味深いのは、「走り参り」に「震災を乗り越えよう」という願いがこもったとの記述である。「福」というのは抽象的ではあるが、震災を乗り越える「復興」も「福」に加わって語られることとなったのである。同日(1996年1月10日)の神戸新聞の記事(記事2)本文も取り上げる。

「本えびすを迎えた西宮市社家町の西宮神社で十日早朝、恒例の「福男選び」が行われ、待ち構えていた約六百五十人の参拝者が一番福を目指して競った。見事に福をつかんだ上位三人は、全員が今年、成人式を迎える若者。しかし、震災ではそれぞれ自宅が全半壊する被害を受けており、「早く町が復興しますように」と願いをかけた」

選ばれた福男(一番福は大阪体育大学学生、二番福

は陸上部出身の会社員、三番福は明石高専5年生)全員の家(西宮市、芦屋市)で被害が出ている現状で、「復興しますようにとの願い」というメッセージが伝わる紙面となっている。紙面では「競った」「福をつかんだ」とはあるが、神社側の主張でもあった「福男選び」という語が、まず先に来ていること、そしてその前の記事と同じく「福」の概念が震災によって「復興」の意味まで包含していることは注目すべき点であろう。

当時の読者、参加者にとっては、たとえ参加者たちが「競った」としても、福男として被災者が「選ばれた」との事実は、開門神事自体に更なる意味性を持たせることに繋がったのではないだろうか。2000年初頭にマスメディアの報道によって全国的に認知されるまでは、阪神間の行事・神事という意味合いが強く、参加者もほぼ阪神間に限定されていたことを考えれば、必然的ではあるが、この年の福男すなわち一番福から三番福までの全てが「被災者」という特異性と、「早く町が復興しますように」との福男のコメントは、境内で忌籠を終えた後の走り参り神事という以外の意味が付け加えられていると言える。

踏み込んで言及するならば、自らの脚力を競うために参加し、福をつかみ取るところから、1996年以降、「復興」という概念がメディアによってさらに付与されることにより、「復興のために選ばれた福男」たちによる「地域のために参加する神事」という新たな意味がこの時に加わることとなったのである。

4. 元参加者が奉仕する神事へ

この1996年の神事後、その震災復興に関する話題性やスピード感のある競技性が注目されたこともあり、新聞社や在阪の準キー局、地方局のみならず、TBSといった全国ネットのキー局が直接取材を実施し、それが全国的に放映されたことによって、日本全国における認知が急速になされた。

この知名度の向上によって、参加者が爆発的に増えたのだが、元々は神社の開門時に偶発的に競走したことによって生まれたイベントに端を発する神事だったために、この祭礼を開門前より統率する実施団体がなく、2000年代に入るとスタート位置を巡っての争いが参加者同士で起きることとなってしまった。特に2004年には数日間開門前より集団で泊まり込んで最前列を確保し、開門時には他の参加者をブロックし、その集団から一番福を出そうとする「事件」が発生。この「事件」によって、ネット空間をはじめ、社会的に批判が噴出し、一時はこの開門神事の廃止(神社側が福男を選ばない)ことまで検討された。しかし、その際に継続を願

って立ち上がったのが、歴代の福男を含めた参加者たちであった。

2004年の1月以降、非公式に神社にて協議が行われ、本発表者も含めたそれまでの開門神事の参加者は、何とかして存続する方向に持っていくべきだとの強い要望を出すに至ったのである。その結果、参加者たちを主とするメンバーが中核となり、それを神社、そして氏子青年会である「若戎会」が全面的に後援する形をとって、「西宮神社開門神事保存会」が結成される運びとなり、4年間、元参加者たちと氏子青年会、神社等の連携によって、開門神事の実施団体として機能することとなった。

その流れの中、2008年になって、兵庫県警察が参詣客保護の部分から動き出した。全国的にも雑踏対策において、行政側が動く事例が増えていた。特に兵庫県においては、2001年の明石市での花火大会における雑踏による圧死事件が起こった。その雑踏対策の文脈から、西宮神社への要請を出したのである。具体的には、「所属があいまいな保存会を神社の監督下に置いて、開門も含めて催行するように」との要望があったのである。つまり、神社がこれまで行ってきた、神社の門開けを行い、拝殿にたどり着いた参加者のうち三番目までを福男として認定するのみならず、神事前に事故を未然に防ぐために参加者を門前に整列させ、さらに開門後に整然と参詣客を誘導するといった、開門神事全体の運営にも神社が関与することが決められた。そしてその執行団体として、元参加者たちの同好会的だった開門神事保存会を神社の公認の組織として認可し、協働した上で、事故なく催行させることが決まったのである。このことによって、地縁とは関係のない元競争の参加者たちが、神事の奉仕者となって、祭礼の運営奉仕に当たる、日本の神道的な祭礼においてはあまり類を見ない祭礼実施の形態が確立することとなったのである。

5. 改めて付与された意味性

その正式な講社の講長に就任し、組織運営にあたることとなったのは、参加者の1人であった平尾亮氏である。学生時代に陸上部に所属していた彼は1997年より開門神事に参加し、1998年には二番福に選ばれた。1999年の開門神事では、開門後に諸衆を抑え、他を圧倒する走りを見せたものの、拝殿を目前に大転倒をし、福男に選ばれなかった。さらにその同年の12月に高速道路にて、足を失ってしまうかもしれない交通事故に遭った。長期入院後、2001年には病院から一時退院し器具を付けての参加。その後も全速力では走れなくな

ったものの、「えびす様に生かされた」との思いは強く、2004 年まで欠かさず参加を続けた人物である。2008 年 12 月の正式な講社設立以降、2021 年に至るまで、平尾氏が開門神事全体を取り仕切り、1 月 10 日午前 6 時の門前の「開門」の発声を執り行っている。一番福にはなれなかったものの、現在は地域のため、参加者のために、福を分け与える「真の福男」ともいえる人物であり、本調査者のこれまでの論文においては、「えびすに愛された男」と評している。

その彼が、1996 年に初めて開門神事に参加した際に着ていた服は、神戸在住の Wakkun (涌嶋克己氏) がデザインした「ガッツくん」が描かれた、被災者支援のトレーナー「ガッツや KOBE」であった。そして 1999 年の大転倒、2001 年の長期入院の復活から 2021 年の現在に至るまで、彼は「勝負服」としてこのトレーナーを着続けて参加している (写真 1)。図らずとも、先述した、1996 年の「復興の神の開門神事」の意味性の名残が、彼によって引き継がれることとなったのである。

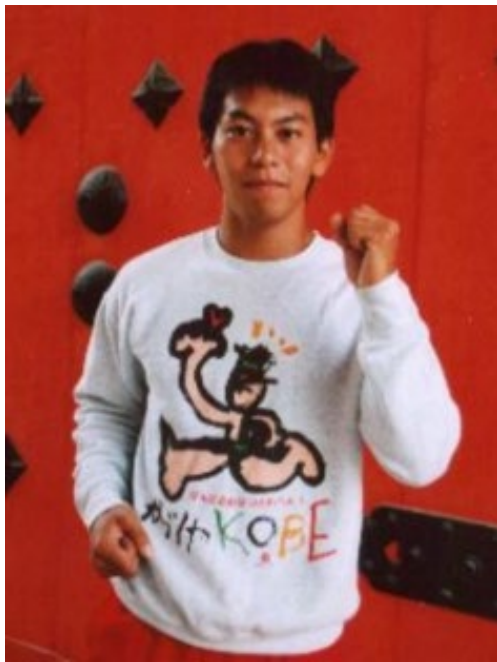


写真 1 トレーナーを着用する参加者当時の平尾亮氏
平尾亮氏のホームページより 5)

その「復興の神」の意味合いが大いに発揮されることとなったのは、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災後においてである。その明くる年、2012 年の開門神事では、開門神事講社が平尾氏の発案で、転倒防止とともに東日本大震災の被災者を勇気付けたいとの思いから、「黄色い手袋」を参加者に装着する運動や、チャリティーグッズを販売する運動を開始することと

なった。ここから、開門神事講社は開門神事を軸として、他地域に対してのボランティア活動も担う側面を持つこととなった。このように、神事の執行のみにとらわれず、震災復興の祈り・メッセージを自発的に織り込んでいこうとしたのである。

先述の通り、1995 年 1 月 17 日、阪神淡路大震災が起こった当時、この西宮神社も被災し、完全な復旧までに時間を要した。これは西宮神社に限ったことではなく、西宮市全体がそうであった。その際、全国からたくさんのボランティアが訪れ、義援金も集まった。その西宮地域がたどった復興やその時の感謝の気持ちを当時の東日本大震災へと繋いでいこうと考えたのである。本来なら 1996 年当時であった震災復興の記憶やそこに込められたメッセージは参加者が若年層であることもあり、入れ替わりも激しいために風化されていくのだが、偶然にも彼やそれ以外のメンバーが、15 年間参加し続けたために、そのメッセージ性も保持されたままになっていた。実は、平尾氏のこのチャリティーグッズ販売の提案時には、異論が出た。しかし、多くのメンバーが結果として了承し活動していった背景には、震災復興に対する開門神事の持つ意味性のメンバー同士の合意が底流としてあったからではないだろうか。神社としても、被災した東北地方に在する神社への支援を行っていたこともあり、この働きかけに関しては了承した。そして現在まで、チャリティーグッズ販売と神事参加者への幸せの黄色い手袋の配布は続き、「震災復興に向けての祈り」の意味性が毎年付与し続けられることとなった。

6. 東北で誕生した走り参り・相互作用する祈り

前項の活動とほぼ同時代的に、東北では興味深い事例が発生していた。それは、福男選別に類似したイベントが、震災復興の文脈で誕生したことである。1つは宮城県の女川町での「女川復幸 (ふっこう) 祭」における、「津波伝承 女川復幸男」である。2013 年に地元の若者たちが集い、その中で西宮神社の開門神事福男選びを参考にして生まれたイベントである。詳細としては、津波が女川に到達した時刻に、港から約 350 メートル先の高台にある女川小学校までを走るというものである。そこで一番になった人物には、現在「希望の鐘」と呼ばれる、震災時の津波によって流されたものの、震災後にながれきの中から発見された、旧 JR 女川駅前にあったからくり時計だった鐘を鳴らすことが出来る権利が与えられる。鳴らすことによって、「津波が来たら高台に逃げる」という民俗知を継承している。復興の願いとともに、津波の怖さを伝えるメッセージも

含まれている。2015年には、復興した駅舎、鉄道線の再開イベントもあり、女川の一大イベントの中で大いに注目を集めている。



写真2 女川での平尾氏（2014年3月）
平尾亮氏のホームページより引用 6）

近年、福男競走的なイベントは、全国的にも誕生しているが、西宮神社に直接「参考にさせて欲しい」との申し出があったのは、このイベントが初めてであった。そこから関係が生まれ、2014年には平尾氏と2014年の福男、さらに西宮神社の神職が女川を訪れ、このイベント開催に加わると同時に、西宮神社公認の行事とした。この時、競争の合図である「逃げろ!」の発声は、平尾氏が行った（写真2）のである。そして2015年には2年連続「復幸男」となった鈴木大氏が西宮神社に招待され、開門を講社メンバーと共に奉仕した。

「復幸祭」自体は、女川町の復興がひと段落したこともあり、2019年をもって終了するものの、津波から逃げるといった「民俗知」を体感でき、「復幸男」は伝えていく義務があるとして、今後も続けるとのことである。コロナ禍が本格的になっていく直前の2020年1月の西宮神社の十日戎には女川から「復幸男」イベントの立ち上げから関わっている主催者たちが訪れ、「本家」の開門神事の開門奉仕を務めた。

2015年には、2例目の「西宮神社公認イベント」が誕生した。それは2月に岩手県釜石市の日蓮宗日澤山仙寿院と釜石市出身の有志らが共同で行っている、「新春韋駄天競走」である。釜石の市街地から、290メートル先の高台にある、仙寿院を目指すというもので、女川と同じく津波被害から逃げることの民俗知の継承と、釜石の復興の祈念が目的である。韋駄天競走では、男性、女性、親子の各部門に分かれて競争をしている。2015年にはこのイベントにも平尾氏が参加し、スタートの合図である銅鑼を鳴らした。「福男」たちには、西

宮神社の十日戎開門神事福男選びの福男に授与される、戎の神像を渡すなどの、公認性を出した交流となっている。女川の復幸男たちと同様に、2016年1月には韋駄天競走の「福男」、2017年には親子部門の「福親子」、2018年にはこの韋駄天競走の主催者の一人である、釜石応援団の団長が、そして2019年1月には女性部門にて2年連続「福女」となった阿部氏が西宮神社に招待され、開門神事を手伝っている。

両イベントを通じて平尾氏は、「1995年の阪神大震災での全国からの支援に改めて感謝する。阪神間の復興とともに歩んだ福男選びが、神社や寺院の枠を超え、釜石や女川で命を守る行事へとつながったことが嬉しい」と話す。なお、東北の2行事においても前項で述べた「黄色い手袋」を配布した上で行事が実施され、西宮と東北との連帯が目視できるようになっている。



写真3 開門前に語る「福女」（2019年1月）
平尾亮氏のホームページより引用 7）

東北からの福男たちとの交流は、ただ開門の奉仕だけにとどまらない。毎年の東北からの賛助者に対しては、1月10日の午前3時、つまり開門神事の3時間前に、最前列に並ぶ約100名の参加者に対し、東北地方の現状と復興に対する動きについて語る機会を開門神事講社が設けている（写真3）。その「語り」の後に平尾氏が1995年に西宮の受けた震災と全国からの支援による復興について語り、その感謝の気持ちをもって、次に復興が行われている地域に伝え、行動していくことの大切さを述べるのである。一連の話の後で、講社から参加者に先述の黄色い手袋を手渡される。この手袋をはめて各参加者が「復興への祈り」も含めて、走るという形がこの10年で常態化することとなった。

ここから明らかになることは、1996年より十日戎開門神事に付与されてきた大震災からの復興という意味性が、2011年の東日本大震災を契機として、阪神大震災を経験していた平尾氏を筆頭とする開門神事講社の

メンバーによって再度付与され、強化されたことである。さらに西宮神社による東北支援も相まって、東北地方で、津波からの逃避という文脈において開門神事をもとに生まれた2行事が西宮神社公認となり、行事関係者が招待され、復興の話聞く機会も設けられた。一連の動きによって、相互に交流し、お互いに祈り、民俗知を共有するという意味性・宗教性が近年になって付与され、強化されていることが分かる。

7. コロナ禍において如何に開門神事は催行されたか

9月下旬の西宮まつりが終わったのち、2021年1月に開催予定の十日戎、また開門神事福男選び開催に関する是非について西宮神社に関連する諸団体が集まって話し合いが持たれた。神社として一番重要な祭礼は「西宮まつり」であるが、参詣客が1月9日から11日の三が日で100万人を超えるとされる「十日戎」は関西地域で見ても最大規模の参詣行事であるため、多くの団体が関与する。特に10日の午前6時に開催される「開門神事福男選び」は全国的にも注目度が高いことから、その開催の是非は慎重に協議された。

諸団体の中で、開門神事の奉仕主体である「開門神事講社」を含めた全体会がまず10月13日に開催された。その会の中で決定したことは、「距離を取ったうえでの開門神事福男選びの実施」であった。具体的には、9日より現地にて実施していた、走り参りの位置決めの中引きの中止であった。2020年1月9日までは、約1500名の神事参加希望者のうちから、赤門前から走り参りをすることのできる計258名(グループ108名、第2グループ150名)を選んでしたが、「密」を生み出してしまふこととなるため、事前の郵送での応募へと切り替えた。さらに赤門前からの出走人数を80名にまで制限し、出走の段階で距離を取った福男選びの実施を企画したのである。

12月4日には、警備関係や地域自治会の方々も参加した打ち合わせ会が開催され、前記の変更が承認された。実際に、郵送による抽選の公募は11月中旬より開始され、12月15日に締め切り、17日に「開門神事催行安全祈願祭並びに事前抽選会」が実施する運びとなっていた。しかし、コロナウィルス感染拡大は収まらず、感染者数は増加する一方であった。政府は12月28日から翌2021年1月11日までの間、全国一斉に「Go To トラベル」事業を一時停止する考えを表明した。結果として、西宮神社はこの表明を受けて、「福男選び」を中止することを16日に正式表明したのである。この表明に関しては、インターネットを含めた各メディアで大きく取り上げられ、社会的な反響も大きかった。

福男選びが出来ないということに嘆く声もあったが、概ね仕方がないとする意見が多かった。



写真4 2021年の十日戎開門神事
西宮神社開門神事講社撮影 8)

ただ、ここで本報告者が指摘したいのは、この「中止」とは、西宮神社として、「福男を神社として選ぶのは取りやめた」のであり、「開門神事」に関しては催行をしたのである。その方法としては、まず午前6時の開門を開門神事講社で行い、開門後20人ほどの開門神事講社役員と賛助をしている明石高専の学生が距離を取って整然と拝殿までの参道を歩き、到着後に集団にて参拝した(写真4)。そして、その直後に同じく徒歩にて一般参加者が参拝する形をとった。

つまり、忌籠後の「開門神事」を神社(の指導のもと、開門神事講社が実際に奉仕すること)で実施し、その後、講社員が他の参詣客を率いる形で徒歩による参拝が実施された訳である。つまり、開門し、「病魔平癒も含めた祈り」を拝殿にて実施するという、「伝統の継続」という最低限のラインは遵守し、社会情勢に適合させようと考えたのではないかと。感染症対策からこれまでの女川・釜石の東北地方からの参加者は招待されなかったが、一般参加者や近隣の小中学校の児童生徒に東北地方への励ましのメッセージを書いてもらい、それを神社経由で東北地方へ送ることも企画された。

なお、9・10・11日の三が日の十日戎の参詣自体に関しては、実施された。ただ境内と氏子地域の露店の出店は、中止された。これによって、三が日自体の参詣客は減少したものの、神社として福笹や熊手などの縁起物といった十日戎限定品の授与を三が日から1月末までに授与期間を延長。マスメディアを通じ、時期をずらしての分散参拝を呼びかけたことによって、参詣客自体の大幅な減少には繋がらなかったのである。

8. 考察：創られた神事と伝統の継続

今回の論考では、コロナ禍における祭礼の継続に焦点を当てた。前回紀要にて報告1)した「西宮まつり」においては、祭礼の催行者の数を減らし、距離を十分にとるなどの感染症対策を施した上で、海上船渡御の中で開催される「台風除け」「豊作・大漁祈願」が主題であった「かざまつり」の後に、「病魔平癒」のえびす舞を挿入することで、祈りの部分を表出させることで、継続に対する意味を持たせた。

同様に、前回の報告で挙げた昭和天皇崩御後の「福男競走」に関しては、明治後期からの創出後より持っていたイベント性を極力排除し、江戸期以前より実施されていたとされる「居籠(忌籠)神事」を拡大解釈し、競争自体を「福男選び」と言い換えることによって、神事性を持たせ、その継続と伝統化に繋げた。

今回、主題としたのは、平成初期に神事として確立した「開門神事福男選び」がコロナ禍でどのように実施されたのかということであるが、結果としては、前回提示した「西宮まつり」や昭和から平成期の「開門神事福男選び」の創出と同じく、「祈り」や「伝統性」を際立たせることでの継続であったと言える。興味深い部分としては、30数年前には開門より前までが「(忌籠)祭り」であり、50年余りの歴史はあるものの、開門以降はイベントと呼んでも差し支えなかったこの「神事」が、伝統性を持ち得、地域や神社、開門神事講社のメンバーたちが「門を開ける」伝統の継続を希求した点である。前項までで論述をしたが、外的要因としては阪神大震災があり、福の神に加え、「復興の神」としての神事が1996年以降強調されたことにある。

阪神間においては、先述の通り、三木英は阪神大震災以降の神戸市長田区の地藏盆の事例や、神戸市東灘区の本住吉神社地車祭りの事例などで、一時的にせよ慰霊の意味を持たせたことを指摘した。しかし、同時にこれはあくまで一時的な変化であった。地車祭りに参加する人々の中で震災の個人的な記憶を持たない人が年を経るごとに多数を占めていくと、慰霊の意味合いは減少し、元々地域の子どもたちを対象とする地藏盆はその性質は変容した。ただ、地車祭りも地藏盆も既存の民間宗教を基に実施されているものであり、地車を動かす祭り、地域の子どもたちを繋ぐ祭礼としての本来の意味へと回帰していったと述べる。逆に特定の宗教を背景に持たない、震災後生まれた兵庫県・大阪府に数多く生まれた震災に関する慰霊碑を巡り歩く、「震災モニュメント交流ウォーク」や鎮魂の意味を当初持たせた「ルミナリエ」などは、震災後四半世紀が

経ち、規模縮小へと繋がっている。

この十日戎開門神事福男選びの場合は、特定の宗教の下で実施されていたために、祭礼の意味合いは変容していったものの、新聞の報道や、それに呼応した参加者たちによって、阪神大震災からの復興というメッセージ性に関しては比較的毀損されないまま、まず21世紀を迎えた。その後、元参加者たちが神事の奉仕に当たることとなるが、そのメンバーたちが阪神大震災を経験した世代であったため、神事の副次的なメッセージとして「復興への祈り」の部分がさらに保持された。そのため、東日本大震災の翌年の2012年には「阪神から東日本へ」というメッセージを付け加え、被災地復興応援のための黄色い手袋を参加者がはめた神事へと変化した。

祭礼の持つ、大きな機能として、その儀礼に意味性・教訓が含まれた場合、「神頼み」と共に歴史的に培われた経験則・民俗知が祭礼を通じて拡散され、長期間人々の生活を利することにある。本来ならば信仰で生まれたコミュニティを主体とした人の紐帯自体が、上記の機能の再確認に繋がるが、東日本大震災によって壊滅的ともいえる被害を受けた地域においては、それを行政に近い部分の層や、残存した宗教団体が、新たにイベントを創出することによってその代わりとした。特に民俗知として、保存し、継承していきかかったことが、コミュニティ破壊の「邪鬼」ともいえる津波から、「いち早く走って逃げる」ことであり、そのモデルとして、走り参りの形式であり、全国的な知名度が高まっていた「開門神事」が選ばれ援用されたのであろう。

そして偶然にも、その西宮は16年前の被災地であり、西宮神社の当祭礼は震災復興のシンボルとして報道され、参加者をはじめとした社会の認知が東日本大震災のおこった2011年にも多少なりとも残っていた。東北の各イベントは、当初は民俗知の継承のために「走る祭礼」を真似ることだけだったかもしれないが、関わり始めたことでこの重要な意味性にも気づいたのではないだろうか。現在では、相互の交流、神事参加者との交歓とともに、「震災復興への祈り」の部分が色濃く強化され、それが伝統として受け継がれているのである。

昭和から平成に代わる1989年に、自粛による催行の危機を脱するために、語が創出され、神事性を付与された「開門神事福男選び」が、2度の震災を経て、平成の30年を過ぎて、人々の宗教性と、復興の神という物語性を持った神事へと変化していったと言えないだろうか。だからこそ、地域・社会は本来の走り参りは継続せずとも、「祈り」の部分が表象される、「開門以後の参拝」こそを保存し、その伝統を継続しようと考えた

のだともいえる。今後のパンデミックや様々な災害、政治状況等に起因する自粛期において、「継続開催すべき祭礼なのか否か」を判断する基準として、コミュニティの活性の文脈と共に、この「様々な祈りが含まれているか」に着目する必要性を、今回の実践調査から明らかに出来たといえよう。

9. 謝辞

当論考は、昨年度の論考に引き続き、2020 年度に特別に創設された、兵庫県の「ポストコロナ社会の具体化に向けた調査検討費補助事業」における研究結果の一部である。補助をいただいたからこそ、このような将来に繋がる研究が可能となった。この場を借りて、厚く御礼申し上げたい。

採択された当初からの目的は、「祭礼実施者や住民を対象に、感染拡大期における祭礼へのニーズ等を調査し、予防対策を十分にとった新たな祭礼の形を提案するもの」である。人はどのようにポストコロナ・ウィズコロナであっても祭礼と関わり続けるのか。今後も、この「西宮まつり」と「十日戎開門神事福男選び」を中心として、ライフワークの一環と位置付け、実践を伴った調査を継続していく所存である。

参考文献・引用文献・出典

- 1) 荒川裕紀: ポストコロナにおける都市祭礼の在り方に関する一考察、明石高専研究紀要、第 63 号、pp.14-21 (2021)
- 2) 三木英: 復興と宗教 震災後の人と社会を癒すもの、東方出版 (2001)
- 3) 三木英: 宗教と震災 阪神・淡路、東日本のそれから、森話社 (2015)
- 4) 森栗茂一: 震災二年目の地藏盆一郊外仮設住宅と復興計画下の市街地から、宮田登編『現代民俗学の視点 第三巻・民俗の思想』、朝倉書店 (1998)、pp.108-120
- 5) 平尾亮 「ガッツくんトレーナー」への思い: <http://leepi.milkcafe.to/essay/gattsukun.htm> (2021.9.15)
- 6) 平尾亮 あの日の朝焼け 平成 26 年「開門神事福男選び」: <http://leepi.milkcafe.to/anohinoasayake/h26.htm> (2021.9.15)
- 7) 平尾亮 あの日の朝焼け 平成 31 年「開門神事福男選び」: <http://leepi.milkcafe.to/anohinoasayake/h31.htm> (2021.9.15)
- 8) 2021 年 1 月 10 日西宮神社開門神事講社撮影 なお、神事の撮影には、本校プロジェクトの一環として、学生が撮影員として携わった。